

〈翻 訳〉

『子どものスポーツのためのガイドライン』

「目次」, 「前書」, 「序文」, 「子どものスポーツプログラムの諸目的」の日本語訳

田 村 公 江

ライナー・マーテンス (イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校),
ヴェルン・シーフェルト (ミシガン州立大学) [編]

この冊子は、「健康、体育、レクリエーション、ダンスのためのアメリカ連盟」に所属する「スポーツと体育のための全米協会」のために準備された。

「健康、体育、レクリエーション、ダンスのためのアメリカ連盟」の住所は下記のとおり。

ワシントン D.C. 北西地区, 16 番通り, 1201

なおこの冊子は、米国小児科学会の承認を受けている。

1979 年 8 月

版權 1979 年

「健康、体育、レクリエーション、ダンスのためのアメリカ連盟」

※この組織は 2016 年現在、「Shape America」という名称になっています。翻訳に関しては、「Shape America」から許可をいただきました。

目 次

「小学校児童のための望ましい競技」特別委員会の委員名簿

前書き

序文

子どものスポーツプログラムの諸目的

若いアスリートのための権利の章典

権利には責任が伴う

子どものスポーツにおける主な論点

注釈付き参考文献一覧

前 書 き

「スポーツと体育のための全米協会」の「青少年スポーツ特別委員会」は、このような『ガイドライン』を整えることが、数百万人の子ども、そして、子どものスポーツプログラムに関わっている数百万人の大人に有益であろうという暗黙の了解のもとに、力を尽くしました。私たちがこの冊子で言及したことが幻想に終わるのか、それとも

現実になるのか、それは分かりません。しかし、私たちの意図が理解されることを、私たちは真摯に願っています。この『ガイドライン』が、子どもたちがスポーツの楽しさを知る手助けとなることを、私たちは心から望んでいます。

編者たちは、1977 年 1 月 16 日および 17 日にワシントン DC で開催された「青少年スポーツ特別委員会」のメンバーであり、この冊子に収められた資料を書き起こしたルーシー・バーケット、ワレン・ギーズ、ルーク・ラポルタ、ローレンス・ラリック、マリー・リレイ、ウィリアム・サヴェイジ、ロバート・シンガー、ウィリアム・ストロングに感謝を捧げます。編者たちはまた、原稿を準備する作業を助けてくれた南オーストラリアのアデレード・カレッジのジョン・ハーバートとイリノイ大学のメアリー・アン・カーマックとジュリー・シモンにも感謝を捧げます。

編者、ライナー・マーテンス、
ヴェルン・シーフェルト

序 文

ますます多くの子どもがプレイしている

「驚異的!」「信じがたい!」「ファンタスティック!」これらは、子どものスポーツプログラムの隆盛を描写する言葉です。今日では、1000万人近くの14歳以下の子どもが、大人向けに組織されたスクールや学校外のスポーツプログラムに参加しています。そして、コーチ、職員、リーグ管理者を務める1500万人以上の大人によって、子どもたちは指導されているのです。子どものスポーツを担っているのは、学校、30以上にも上る全国青少年スポーツ機関、数千の地方および地域のスポーツ組織です。今日、子どもたちが、かつてないほどバラエティに富んだスポーツ機会を持っていることは確かです。参加の機会は、技能に恵まれた男の子に限定されることはなくなりました。参加の機会は、女の子にも、障がいを持つ子どもにも、そして技能に恵まれていない子どもたちにもますます開かれるようになったのです。

しかし論争がないわけではない

しかし、子どものスポーツ人口は、論争なしに増えてきたわけではありません。声高な反対者たちはメディアを通じて子どものスポーツにおける危険を誇張し、一方、熱烈な支持者たちはスポーツの長所を訴えるのです。どちらの側にも言い分があります。というのも、子どものスポーツのもっとも熱烈な代弁者たちでさえ、改善が必要とされることには同意するからです。

このガイドラインが作られた理由

そのようなわけで、この『ガイドライン』の目的は、コーチ、体育教師、レクリエーション指導者、スポーツ職員らが、安全で満足できる、そして有益な経験を若いアスリートたちに提供できるように手助けすることです。『ガイドライン』は、親、教育者、医師、コミュニティ・リーダーが、子どものスポーツプログラムの価値を規定したり、これらのプログラムへの関わりについて何か決めたりするのに役立つように書かれました。

この『ガイドライン』の先駆けとなったのは、

次の2つの意見書です。すなわち、1952年に書かれた「子どものための望ましい競技のあり方」と1968年に書かれた「小学校児童のための望ましい競技のあり方」です。医学、レクリエーション、体育の専門家たちは、力を合わせてこれらの意見書の改訂作業を行い、『ガイドライン』を準備しました。全国青少年スポーツプログラムの理事たちも、彼らの文書を提供しました。また、スポーツ科学者たちは経験あるコーチたちとチームを組んで、有益な助言を開発しました。

手短かに言って、この『ガイドライン』は、子どものスポーツに関する多様な情報源から、これまでに蓄積されてきた知恵を抽出し、人々に伝達しようとするものです。

私たちはすべての子どもにプレイして欲しい、ただし安全に！です

『ガイドライン』の意図は、子どもにとって安全で楽しめる条件のもとで、スポーツ参加を最大限に奨励し、促進することです。スポーツは、男の子にも女の子にも、豊かな家庭の子どもにも貧しい家庭の子どもにも、障がいのある子どもにも身体強健な子どもにも、不器用な子どもにも身体能力に恵まれた子どもにも、そしてどのような肌の色や宗教の子どもにも有益です。

学校と学校外のスポーツのためのガイドライン

この『ガイドライン』は、大人が運営するスポーツプログラムに参加する13歳以下の子ども⁽¹⁾を対象としています。(とはいえ、『ガイドライン』の大部分は13歳以上の子どもにも同じように当てはまります。) 私たちはこのような子どもたち全てを「若いアスリート」と呼ぶことにします。大人が運営するスポーツプログラムとは、規定ルールに従って運営されているスポーツにおいて子どもたちのパフォーマンスを比較するために、大人が子ども部門の競技スケジュールを整えているスポーツプログラムのことです。学校内のプログラムは、学内試合か学校対抗試合かに分類されるでしょう。学校外のプログラムは、主に次のようなタイプの組織の後援を受けています。

1. 全国青年スポーツ団体（たとえば、アメリカ・リトル・リーグ、ポップ・ウォーナー・フットボール、アメリカ少年クラブ）
2. 宗教組織（たとえば、YMCA, YWCA, カトリック青年組織, B'nai B'rith（ブナイ・プリス：ユダヤ人コミュニティ相互扶助組織））
3. コミュニティー・サービス・クラブ（たとえば、キワニスクラブ、オプティミスト⁽²⁾、退役軍人会（veterans of foreign wars））
4. 非営利地域団体（特定のスポーツを後援するためにコミュニティに作られた団体）
5. 地域のレクリエーションまたはパーク局⁽³⁾

過去

初期の関心事は勝つことへの過剰な熱意

少年のために組織された最初のスポーツプログラムは、体育教師によって、1900年代の初期に小学校に導入されました。当初、これらのプログラムは大いに盛んになりましたが、世界大恐慌の間、勝つことへの過剰な熱意に対する批判を受けるようになり、専門教育者たちは、高度に組織された学校対抗の競技は望ましくないと決定しました。彼らは、子どもが学校内のスポーツプログラムに参加して、昼間にプレイするのが良いと主張しました。その結果は、小学校のスポーツプログラムの衰退でした。

学校外スポーツプログラムの隆盛

しかし、学校内プログラムは、思春期前の子どもたち（9歳から12歳の子どもたち）の競技スポーツへの欲求を満たしませんでした。それどころか、国の労働力として必要とされなくなることによって⁽⁴⁾子どもの自由時間が増えて行ったため、全盛を極めるプロスポーツや、大学対抗、高校対抗のスポーツプログラムを真似たいという飽くなき欲望が生じました。その結果、学外団体（ここには親睦団体、宗教団体、公共のレクリエーション団体が含まれます）が、少年たちにスポーツプログラムを提供する機会をつかんだのです。学外団体の運営者たちは、運動競技を盛んに

すれば少年犯罪を減らすことができると信じたのでした。

学校プログラムと学外プログラムの分裂

これらの学外スポーツプログラムは急速に成長しましたが、教育者たちを多いに失望させるようになりました。というのも、それらのプログラムは訓練を受けていない大人のボランティアたちによって運営されていたからです。教育者はそのことを良く思いませんでした。そこで、教育者と医師は、安全で有益なスポーツプログラムを運営するための助言を含む公式の方針声明を刊行することによって、スポーツプログラムの改善に乗り出しました。不運なことに、これらの助言は、つねに根拠十分というわけではありませんでしたし、学外の後援者たちから、彼らのプログラムへの非難と解釈されることも、しばしばでした。まったくのところで、これらの助言を遵守していたら、学外の前思春期児童（9歳から12歳までの子ども）のスポーツプログラムは、とてもやっていけなかったでしょう。教育者と医者が刊行した方針声明は、当然、訓練を受けていない大人の指導者が子どものスポーツプログラムの運営に携わることに反対しました。しかし、学外プログラムは、もっぱら、訓練を受けていないボランティアによって組織され、監督され、指導されていましたし、それは現在も続いているのです。こうして、これらの助言は、幾つかの小学校に導入されるにとどまり、学外スポーツプログラムの後援者たちには、完全に無視されました。

ボランティア・リーダーは欠かせない

教育者と学外プログラムの管理者の間に不可避免的に生じた対立は、どちらにとっても、子どものスポーツプログラムの質を向上させることの妨げとなってきました。今日では明らかなことですが、ふつうの人に手が届く広範囲のスポーツプログラムを持続し、より多くのプログラムを求める需要の拡大に応えようと思ったら、全てのレベルで専門的な指導者層を提供することは経済的に不可能です。訓練を受けたリーダーに指導され、管理されることが望ましいということを否定する人

などいないでしょう。しかし、ボランティアの指導者層が過去において価値ある貢献をしてきたこと、そして未来の子どものスポーツの発展に欠かせない存在であるということを、私たちは認めなければなりません。ボランティア・リーダーの使用を非難するのではなく、協力的に働いて、ボランティア・コーチのための訓練プログラムを提供し、子どものスポーツの重要な側面についてもっと研究を進め、関係者グループ全ての間の連絡系統をよりよいものに発展させるところに解決があります。

次は何？

「若いアスリートのための権利の章典」を執筆するにあたって、私たちはまず、子どものスポーツの目標を吟味しました。子どものスポーツのために大人は「目標」を設定するものですが、若いアスリートの最善の利益にかなうかどうかを測定することによって、こうした「目標」が評価されることを、私たちは願っています。また、これらの目標の達成に結びつくかどうかを測定すること

によって、大人が自らの「振る舞い」を吟味することも、願っています。

子どものスポーツプログラムの諸目標

参加することの長所

子どもがスポーツに参加することから得られる有益性は、たくさんあると考えられます。子どものスポーツ推進論者たちは、スポーツがいかに青少年の身体的、心理的、社会的発達に寄与するかを示す説得力のある実例を挙げています。じつさい、彼らが子どものスポーツの目標だと考えていることについて、たくさんのが、教師、医師、コーチ、親によって書かれてきました。こういった資料—400編以上の刊行された文献—を内容分析したところ、20個の目標のリストができました。これらの目標は「表1」に書いてあります。

表1 子どものスポーツプログラムの目標
(子どものスポーツに関する資料の内容分析によって見定められた目標である。)

1. 運動能力を発達させる。
2. 体力を向上させる。
3. 子どもたちに、どのように協力するかを教える。
4. 積極的な自己概念につながる達成感を発達させる。
5. 後々まで続くスポーツ参加への関心と意欲を発達させる。
6. 健康で強いアイデンティティを発達させる。
7. 頼り頼られる活動を通して、独立心を発達させる。
8. 社会の価値を増進し担う。
9. 道徳的成長を促す。
10. 楽しみを持つ。
11. 社会的能力を発達させる。
12. 家族と一緒に過ごすことを促進する。
13. 身体的—感情的な学びのための機会を提供する。ここには、感情、イマジネーション、身体がなしくることへの評価を理解し表現することを学ぶが含まれる。
14. スピード、強さ、持久力、バランス、柔軟性、機敏さを発達させる。
15. リーダーシップのスキルを発達させる。
16. 決定を下すことと責任を引き受けることを学び、それによって自己信頼、情緒的安定を発達させる。
17. スポーツマンシップを教える。
18. イニシアティブ（自ら進んで物事に取り組む気性）を発達させる。
19. 子どもにどのように競い合うかを教える。
20. 他者との比較を通して自分の能力について学べるように、子どもたちを助ける。

スポーツの目標は単なる参加を通しては実現されない

スポーツに参加しさえすれば、前述の目標のうち幾つかであれ達成されると確信できたなら、競技プログラムは申し分なく正当化されたことでしょう。明らかに、これらの目標を表明するだけでは、子どもたちが皆、どのプログラムにおいても、すべての有益性を獲得することの保障にはなりません。また、これらを目標として明言しているスポーツプログラムに参加しさえすれば、目標が一つひとつ獲得されるだろうとも言えません。これらの目標の多くは、スポーツ以外の数えきれないアクティビティを通して獲得されるでしょう。もっとも、スポーツは、それらを獲得するための、文化的にもっとも身近な方法の一つであるのですが。これらの目標は、若いアスリートのニーズと限界を理解している、技能のあるコーチ、適格性のある職員、そして熱心な親の努力が組み合わさったときにのみ、達成され得るのです。私たちがこれらの目標に関して強調したいのは、このことです。

徹底的に取り組むための機会を提供する

「スポーツの独自のポテンシャル(潜在的可能性)」

言葉には表しませんが、ある信念を多くの人が抱いています。それは、私たちの社会において成功をおさめる生き方をするのに欠かせないスキルと価値観を子どもが獲得することにスポーツは役立つはずだ、スポーツにはそういう独自のポテンシャルがある、という信念です。スポーツの利点として認知されることはめったにありませんが、スポーツには、ものごとに徹底的に、集中して取り組む機会を提供する、という特性があります。ジェイムズ・コルマンは、このような取り組みをする能力を発達させることの重要性を強調しました。彼は、「人間のもっとも偉大な業績はもちろん、もっとも満足できる個人的経験も、このような集中から生じる。それは、外的なプレッシャーによるのではなく、人を駆り立て、注意を集中させる内的な動機から生じるのである。」と述べています(原注1)。今日、子どもは、このような取り組みをする機会をスポーツに求めています。たぶ

ん、プレイしたいという本来的な動機を持っているからでしょう。

大人と交流する機会を提供する

スポーツはまた、人を成長させる様々な経験に参加する機会を、子どもに提供します。そういった機会は、学校、家庭、教会など、スポーツ以外の環境では得難いものです。スポーツには人を夢中にさせる性質があるので、しばしば、大人が自分の抑制を緩めることが起こります。そういうとき、子どもは、マスクをつけていない(素顔の)大人と交流する機会を得るのです。

スポーツはまた、認知的学習の重視と身体的・情動的学習の機会を釣り合わせることによって、子どもの発達に特別な寄与をします。スポーツを通して、子どもは、自分の身体がなし得ること、なし得ないことを発見し、複雑な動きができない不満や、それができたときの快感を経験するので

「責任」を教える

スポーツのもう一つの特性は、スポーツにおける相互依存の関係が、子どもを頼りにする機会を大人に提供することです。通常は、子どもが大人を頼っているのですから、関係が逆転するわけです⁽⁵⁾。加えて、スポーツにおいては、全ての子どもが等しい能力を持っているわけではないという事実が明らかになるものです。スポーツは、この事実によって機会均等の原則がいかに影響されるかを見る機会を、参加者に提供します。

楽しさとフィットネス(健康)を忘れないこと！

スポーツは、身体的健康の向上や維持に役立ち、身体的健康と楽しさをユニークな仕方です。これも、スポーツの持つ特性の一つです。スポーツを楽しむ人々は、スポーツを続けることがより容易になり、それによって、身体的に適切な状態を保つことがより容易になります。そして、身体的に適切な状態にある人々は、より一層、スポーツを楽しむことができます。この相互関係は、子どもが生涯にわたってスポーツをするための土台をつくる鍵で

す。

勝つことはもっとも重要なゴールではない

「口に出してはいけない目標」

私たちは、スポーツの目標を抽出するために400編以上の文献を吟味したのですが、「勝つこと」を子どものスポーツの目標の一つと述べている文献は、ただの一つもありませんでした。近年、イリノイ州で行われた調査^(原注2)が明らかにしたことです。ボランティアのコーチたちは、勝つことを、子どものスポーツプログラムにおいて最も重要度が低い目標と考えています。実際、子どものスポーツに関わっている人たちは、一貫して、重要なのは「勝つか負けるか」ではないと言っています。彼らはむしろ、スポーツを通じて明日のリーダーを育てることこそ彼らの第一の役目であると、強く主張しています。

…しかし勝つことは重要である

とはいえ、ほとんどのコーチやアスリートが知っているように、勝つことはスポーツにおいて重要な目標です。勝つために努力することは、競技スポーツにはつきもののゴールです。勝利を求めないことは、競技者として不誠実であり、それは、スポーツの本質を破壊します。

「勝つこと」は表に出なくなる？

それなら、なぜ、勝利という目標はめったに表現されないのでしょうか？おそらく、子どものスポーツにおける勝利への過熱に対して、あれほど多くの批判が浴びせられてきたために、それは、口に出してはいけない目標になっているのです。ここにはパラドックスがあります。勝利という目標を表現することがこのように憚られるにもかかわらず、子どもが競技している体育館や野外競技場を一度訪れてみれば、表に現れている「大人の振る舞い」のほとんどが、子どもの発達よりも勝利を案じてのものであることが分かります。

しかし、勝利への過熱を理由に、大人が運営している子どものスポーツプログラムの廃止を唱えることは、後ろ向きなことでしょう。勝つこと、より正確に言えば、勝とうと努力することは、子

どものスポーツの他の目標を達成するために欠かせない、とても重要なことなのです。達成することが難しいゴールをめざして努力することを通じて、子どもはスポーツマンシップを学び、リーダーシップのスキルを獲得し、イニシアティブ（自ら進んで物事に取り組む気性）を発達させます。

勝つことが正しい視野のもとに据えられている時……

勝つことが、「子どもが第一、勝利は第二」という正しい視野のもとに据えられている時、スポーツプログラムは、運動を楽しみ、上達しようと努力し、学ぶことにつきものの失敗を恐れない、そして、賞賛と建設的批判を受けて成長する子どもを育てます。適切なリーダーシップによって、スポーツプログラムは、責任を引き受け、他者を受け入れ、そしてとりわけ、自分自身を受け入れる子どもを育てます。

子どもが第一、勝利は第二

「子どもが第一、勝利は第二」という哲学を是認することは、たいていの大人にとってやさしいことです。しかし、競技試合の「熱気（ヒート）」のさなかでそれを実践することは、しばしば、非常に難しいのです。「子どもが第一、勝利は第二」という哲学を一貫して実践するためには、『ガイドライン』を是認する以上のことが要求されます。この哲学を心から納得して推進すること、そして、一貫してこの哲学にふさわしい振る舞いができるように自分をコントロールすることが要求されるのです。子どものスポーツプログラムを改良する挑戦は、「子どもが第一、勝利は第二」という哲学を大人に是認させることなく、実行させることをめざしています。「若いアスリートのための権利の章典」は、この目的のために準備されました。つまり、大人に、「子どもの幸せが第一、勝利は第二」を思い出させるために準備されたのです。

【原注（出典注）】

(原注1) J. S. コルマン (Colman), 1974『青年時代(ユース): 成人への移行』シカゴ大学出版

〔原注2〕 Martens, R and Gould, D, 1978 「誰がアメリカのボランティア・コーチなのか？」 刊行されていない手稿

【訳注】

- (1) アメリカの学年は、小学校が5学年、中学校が3学年、高校が4学年である。13歳以下というのは、小学生と中学生のこと。
- (2) オプティミストディンギーと呼ばれる小型ヨットのクラブ
- (3) レクリエーションと公園についての行政サービスを提供する部門
- (4) 20世紀初頭には、アメリカにおいても児童労働は当たり前のことだった。
- (5) 大人に頼りにされて何かを任される経験を通じて、子どもは「責任」を学んでいく。